

私の懐ふところに

私の懐ふところで、すやすやと眠ねむるわが子。

「今日はポリオ※1の予防接種で疲つかれたのかな。」

現在、日本では生後三ヶ月になると地域の医療機関※2でワクチンが無料で接種されています。私は中学校三年生だった十年前のことを思い出し、当時書いた作文を出しました。

二期期の終わりの十二月十日、僕は生まれて初めて海外に行きました。行き先はミャンマーとベトナムです。旅の目的は、子どもNGOの活動で、ポリオワクチンいっせいとうよ一斉投与の国家式典に参加し、ワクチン投与に実際に立ち会うことでした。

日本では当然のように予防接種が行われていますが、世界では今日も大勢の子どもたちが亡くなっているという現状を知り、子どもNGOのメンバーは、募金活動やアルミ缶を集めたりして支援しえんをすることにしました。今回、その多くの方々の思いを届けに行くために日本を出発しました。

ミャンマーのワクチン投与会場は、赤ん坊ほらを抱だいたお母さんたちが大勢並び、まるでお祭り会場のようににぎやかな雰囲気ふんいきでした。

いざワクチン投与になると、本当に僕たちがやっているといいのかという気持ちと、自分の手で人の命が救えるという思いでいっぱいになりました。ポリオワクチンはスポイトを使って赤ちゃんの口から飲ませます。お医者さんに、

「二滴にてきずつね。」

と言われ、スポイトを渡わたされました。僕を見つめる赤ちゃんを前にして、とても手が震ふるえました。スポイトはギュッと押ししたら思っていたよりもとっっても硬かたく、なかなかワクチンが出てきませんでした。ど

うしようと思っていたところ、赤ちゃんが泣き出し、飲ませることができませんでした。このワクチンに日本で募金をしてくれた一千万人の人たちの気持ちが入っているとと思うと、うろたえているわけにはいきません。僕と赤ちゃんの格闘かくとうがはじまりました。いやがる赤ちゃんの口を開け、スポイトを向けます。二滴のワクチンが赤ちゃんの口に入った時は泣きそうになりました。



ミャンマーでのワクチン投与のようす

十二月十六日、ミャンマーをあとにした僕たちは、ベトナムのツーズー病院に行きました。

病院の印象は強烈きやうれつでした。ベトナム戦争で使用された枯葉剤かれはざいの影響えいきやうだといわれる奇形きけいのある赤ちゃんが、標本室ひょうほんしつでホルマリンに漬つけられていました。

「もっと生きたかった。」

赤ちゃんたちは僕に訴うたえかけてくるようでした。これが人間によって引き起こされたのかと思うと、腹が立ち、悲しく情けなくなりました。ツーズー病院を訪れたこの日は僕の誕生日でした。病院を後にしたバスの中で涙が出てきました。

今回訪れた二つの国の二つの薬。同じ人間が開発した薬が、一方で人の命を救い、一方で人の命を奪うばっていました。人間の知恵ちえや技術が全く違う目的のために使われていました。

しかし、嬉しいこともありました。ツーズー病院で暮らす子どもたちの目が、とてもキラキラとしていたことです。片足のない子どもが、

僕たちが持っていた紙ふうせんで、とても楽しそうに遊んでいました。また、枯葉剤の影響で結合双生児として生まれたベトさんとドクさん兄弟が、ツーズー病院を出る僕たちを明るく見送ってくれました。日本に帰る飛行機の中で、僕は今回の旅のことを思い返しました。その時、機内のテレビに、日本の中学生が自らの命を絶ったというニュースが映し出されました。豊かだといわれる国にも、いろいろな悲しみや悩みがあるのかもしれない。僕は、もっと周りの人たちの気持ちに敏感にならなければならぬと思いました。そして、何か感じたら、行動をおこさなければならぬとも思いました。



僕はこの旅で、自分の生き方、生活の仕方を見直しました。

十年前の作文を読み終えた私は、現在のミャンマーについて調べてみました。すると、このポリオワクチン一斉投与キャンペーンを毎年行った結果、ポリオにかかる子どもたちが大幅に減少していました。日本だけでなく世界の多くの人たちが支援を行った結果、すばらしい成果をあげていたのです。そして、さらに多くの支援によって、学校に元氣に通う子どもたちが増えてきたことも分かりました。

先日、ベトさんとドクさん兄弟の、弟のグエン・ドクさんの現在の様子を知ることができました。

ドクさんは、朝七時から夕方五時まで、私たちがかつて訪問したツーズー病院で働いています。院内の枯葉剤被害者施設に、日本など外国からの来訪者を案内することが主な仕事だそうです。

「啓発や寄付につながるから。」
と、記念撮影にも気さくに応じていました。

ベトさんとドクさんは、一九八八年、ベトナムと日本の医師団が協力し、足を一本ずつ分け合う分離手術に成功しました。しかし、兄のベトさんは脳症で寝たきりになり、二〇〇七年に亡くなりました。「一つの体で生まれ、よく遊び、よくけんかをした。悲しくてならない。戦争さえなければ……。」

ドクさんは、二〇〇六年、友人の結婚式で知り合った女性と結婚しました。そして、二〇〇九年、双子を授かり、長男にはフー・シー（富士山）、長女には、アイン・ダオ（ベトナム語で桜の意味）と名付けました。

「戦争は終わり、ベトナム経済は成長した。でも、障害者は教育でも就職でも厳しい立場のままだ。僕はそこを変えたい。そして平和を訴え続けたい。」
とドクさんは言います。

二〇一三年、日本がベトナムと国交を樹立して四十年となりました。世界にはまだまだ多くの紛争があり、子どもたちを取り巻く課題があります。どうすれば、世界の全ての子どもたちが明るく希望をもって暮らせるような、平和で豊かな世界になるのだろうかと思います。でも、そのヒントは、ドクさんが自分の子どもたちの名前に込めた思いにあるのかもしれない。

父親となった今、今度は大人としてこの活動に参加してみたいと思います。子どもNGOの後輩たちといっしょに再びミャンマーを訪れる計画を立てています。

※1…ポリオウイルスが脊髄の一部に入り込み、主に手や足に麻痺があらわれ、その麻痺が一生残ってしまうことがある。

※2…人や動物に接種して感染症の予防に用いる医薬品。